

いぐさ本田における春期雑草防除法

農業研究センター い業研究所 栽培部

担当者：橋本 充

研究のねらい

いぐさ本田において春期以降に発生する雑草は、いぐさの収量・品質に与える影響が大きく、収穫時の作業性も低下させかねない。これら雑草に対する防除法は、まず発生前の一年生雑草全般に対しては土壌処理剤を処理し、また後発生のイネ科一年生雑草に対しては茎葉処理剤を処理するという体系防除法が普及している。しかし、土壌処理剤は、登録数が少なく、その処理適期も限られるという問題点がある。

このため、春期以降に発生する一年生雑草全般に対して効果が高い除草剤の選定を目的として、ピラゾキシフェン・プレチラクロール・シメトリン粒剤(ワンオールS1キロ粒剤)について検討した。

研究の成果

1 除草効果

- (1) DBN 粒剤との体系処理による4月中～下旬の1kg/10a処理で、発生前～始期の一年生雑草全般に対して高い効果があった(図1・2)。
- (2) ピフェノックス粒剤と比較すると、葉期の進んだノビエに対しても有効で、効果の持続性も高かった(図2)。

2 薬害

- (1) 処理量が多いと伸長が抑制される恐れがあるが、処理量1kg/10aで実用上の問題はない。
- (2) イ茎に蛇腹状のくびれが入る場合があるが、その発生茎率は低く、品質に大きな問題はない。

3 作業性

10a当たり散布量が、従来の剤では3～4kgであったが、本剤は1kgであるので、作業労力が軽減される。

普及上の留意点

- 1 従来のいぐさ適用除草剤に比べて処理量が少ないので、過剰散布に注意し、均一に散布する。
- 2 生育時の雑草に対する効果はないので、前処理剤にDBN粒剤を処理する。
- 3 本剤の処理後にイネ科雑草が残る場合は、イネ科対象の茎葉処理剤を散布する。
- 4 伸長抑制およびイ茎の奇形といった薬害の恐れがあるので、砂質土壌や漏水田、排水不良で土壌還元が進んだ圃場での使用は避ける。

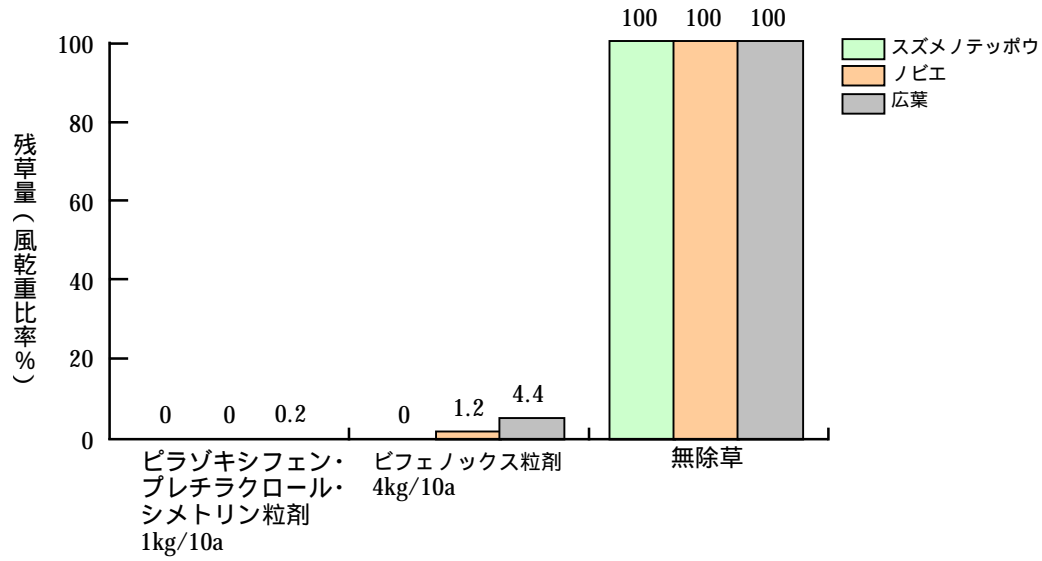


図1 雑草発生前～始期の処理におけるピラゾキシフェン・プレチラクロール・シメトリン粒剤の除草効果

処理時期：平成8年4月24日

3月8日にDBN粒剤3kg/10aを体系処理

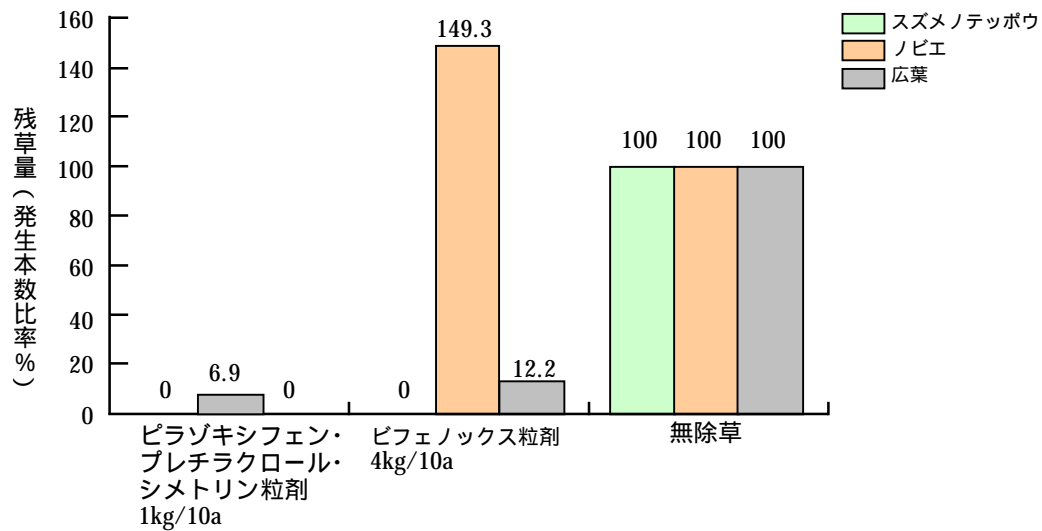


図2 ノビエ1～3葉期処理におけるピラゾキシフェン・プレチラクロール・シメトリン粒剤の除草効果

処理時期：平成9年4月10日

1月9日にリニュロン粒剤4kg/10a、2月22日にDBN粒剤3kg/10aを体系処理